

## 《第10回ひろしま建築文化賞 総評》

「小さな建物が示す広島のこれからの建築文化の可能性」

ひろしま建築文化賞を応募作品のなかから選ぶにあたり、これからの広島での建築文化とはいかなるものであるのかということ審査委員会の委員で確認しながらの選定であった。

広島で活動する建築士事務所が提示したこれからの建築文化を示す建築作品を見つけ、ゆくということになった。

地方の建築文化はモダニゼーションという世界中を一つの論理体系(経済のシステムと普遍的論理)がグローバルに展開する21世紀初頭にどのような事柄として広島という地域で可能なのかということであるが、1970年代以降のポストモダンといわれた時代に、歴史性と地域性を軸に展開したモダニズム批判が結局まがい物でしかない歴史の記号と地域の記号を近代的な建築構造物の表面に貼り付けることしかできなかった問題の先に見える物を見つけるということになる。

地方創生ということがいわれているが、東京への一極集中による地方の人口減少、高齢化、少子化と地方の未来は未だに見えない。近年、地方が特例の債務をして建設される大きな建物によって地域を再生しようとするものが見られるが本当に再生は可能なのだろうか。本年度の建築文化賞の建物は小さな建物がほとんどであったことには大きな意味がある。小さな建物が建築文化として丁寧にこれから作られて行くことにこそ、地方の未来の豊かさとしての広島の建築文化があるのではないかということが見えたことである。



審査委員長 岡河 貢

2つの住宅は広島という斜面地における小さな敷地における住まう文化、木造集合住宅は街区のなかに新しい路地性と住まいの組み立てを示す集住の文化、地方大学における学生の多様な賑わいの場を木造でつくる広島のこれからの教育文化、観光地のトイレにおける広島のもてなしの文化、地域での設計のための小さな仕事場文化、檀家と寺院のコミュニケーションの新しい文化、古い建物を小さな改装で地域の生活に新しい潤いのカフェ文化、これらは広島のこれからの建築文化の可能性を示している。地方創生ということが言われているが小さな建築における丁寧な作り方の集まりが地域の未来の建築文化をこれから創造することが期待される。